

---

# 赤い靴

月夜野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い靴

### 【Nコード】

N3533BA

### 【作者名】

月夜野

### 【あらすじ】

性格も暗く地味なOL依子は、いつも会社の同僚、塔子の引き立て役だった。思いを寄せている男性を塔子に奪われ、彼女に対して憎しみを抱いた依子は、塔子をホームから線路に突き落としかけようとする。

自分のしてしまったことにショックを受けた依子は会社を休職。そして、一ヶ月後。。。

職場に復帰した依子は、見違えるほどに美しく変身して……。

【第144回コバルト短編小説新人賞】最終候補作品。

あか  
赤い靴

つきよの  
月夜野

井田依子は塔子の引き立て役だ。

おそらく誰もがそう思っているだろうし、事実、社内の人たちが陰でそう言っているのを聞いてしまったことがある。

塔子とは二人だけの会社の同期で、入社以来、一緒に行動をする機会も多く、自然と仲良くなった。慣れない環境に人間関係、戸惑う依子に対し、塔子はすぐに回りにうちとけ、仕事の覚えも早く、あつという間に社内に馴染んでいった。

美人で社交的、存在するだけで華のある塔子の回りにはいつも男女問わず人が集まった。

一方、依子は内向的で引っ込み思案。自分の意見すらまともに言えず、ともすれば存在すら忘れられてしまうほどに地味で影が薄い。化粧すらしていない顔に、地味な黒縁眼鏡がよけい暗い印象を与えた。仕事帰りに、春物のコートが見たいと言う塔子につき合うことになったのだが、こうして並んで歩くと嫌というほど思い知らされる。通りすぎる男性の多くが塔子に目をとめ、振り返っていくほどだ。当然、依子は見向きもされない。

依子はこっそりとため息をついた。  
ミニスカートにブーツ。ファーつきのピンクのコートという、お洒落な装いの塔子に対し、依子はジーパンにくたびれかけたスニー

カー。太り気味の体型をさらに膨張させるダウンジャケットというラフな、悪く言えば色気のない格好だ。塔子の立ち寄るショップに行くたび、いつも場違いな雰囲気圧倒され、肩身の狭い思いをしていた。できれば買物になどつき合いたくなかった。ならば断れればいい。けれど、それができなかった。社内でも人気のある塔子に嫌われ、孤立してしまうのが怖かったから。

塔子に従い、ショップを巡り歩いていた依子はふと、靴屋の前で足を止めた。

ショーウィンドウに飾られた一足の白いパンプスに目がとまる。かかと部分に黒いスエードのリボンが飾られた上品なパンプス。

「どうしたの？」

依子の視線の先を追った塔子が、白いパンプスを見て目を輝かせた。

「素敵じゃない。見ていく？」

依子の返事も待たずに店に入ろうとする塔子を、慌てて引き止める。

依子のスニーカーではこの店の雰囲気に合わなさすぎて恥ずかしい。それに値札は隠されて見えなかったが、その靴が高価なものだと容易に想像ができる。

「ちよつといいなと思ったただだから」

「そう？」

でも、あの靴を履いて塔子のようにお洒落をしたらどんな気分だろう。とはいえそんな機会もないし、あの靴に似合う服も持っていない。それでも、依子の頭からあの白いパンプスが忘れられなかった。

次の日、定時のチャイムとともに会社を飛び出した依子は、昨日の靴屋へと真っ直ぐに向かった。ところが、昨日まで飾られていたはずの靴がそこにはなかった。

すでに売れてしまったのか。いや、もしかしたら入れ替えただけ

で、まだ店内にあるかも知れない。そんな望みを抱いて依子は、思いきって店の中へと足を踏み入れた。店内には他の客はなく、嫌でも店員の視線が依子に集中される。依子の足下を見た店員の口元にうつすらと嘲笑がさしたのは思い過ぎしか。とにかく早く靴を買ってここを出てしまおうと、依子は昨日の靴を探してきよるきよるする。が、いくら探しても見あたらない。やがて、作りものめいた笑みを浮かべた店員が近寄ってきた

「何かお探ですか？」

「あの……あそこにあった白い靴ですけど」

依子はショーウィンドウを指差した。途端、店員はああ、と眉根を寄せた。

「申し訳ございません。その靴でしたら。先ほどお電話でお取り置きをして欲しいとお客様よりご連絡をいただきまして……」

つまり、売れてしまったのだ。

「そう……ですか……」

落胆する依子に、店員は似たような白い靴をすすめてきた。

「こちらはいかがです？ これも素敵でしょう？」

店員の言葉にそうですね、と気もそぞろに依子は答える。

似たような靴ではだめなのだ。欲しかったのはあの白い靴なのだから。依子の反応を確かめつつ、さらに別の靴を持ってこようとする店員に頭を下げ、依子は逃げるように店を出た。

こんなことなら昨日のうちにカードを使ってでも買えばよかった。いや、ないものはしかたがない。そう、無駄な出費にならなくて良かったではないか。そもそもあんな靴など買ってもどうせ自分には似合わない。

依子はそう自分に言い聞かせた。

「ねえ、今日の飲み会、営業の安積あしむさんも来るって」

終業後、更衣室で着替える女性たちはみな一様に浮かれていた。

たまに社内で行われる飲み会。自由参加とはいえ、よほどの理由が

ない限り出席するのが暗黙の了解だった。

依子のいる事務はほとんどが女性で、男性といえば中年にさしかかった既婚者ばかり。しかし、営業部は若い男性が多く、中でも安積は仕事もでき、スタイリッシュでかっこいいと社内の女性たちに評判であった。

見渡せば、みなお洒落な格好をして気合いが入っている。化粧直しも念入りだ。浮かれている彼女らを横目に依子は憂鬱な表情を浮かべる。すぐ隣に立つ塔子に視線を向けると、彼女も今日は一段と華やかな装いだった。ふわりと裾が広がる女の子らしい甘い雰囲気のコンプクトドレスにリボンベルト。そして……依子はあつと、小さな声を上げた。昨日依子が変わらなかったあの白い靴を塔子が履いていたのだ。

じつと見つめる依子の視線に気づいた塔子はふふふ、と笑った。

「この靴、絶対素敵だなと思ったの。だから、昨日お店に電話して取り置きしてもらっちゃった」

昨日店員が言っていた客とは、塔子のことだったのだ。呆然とする依子の反応に、塔子は首を傾げた。

「もしかして、依子も狙っていたとか？」

依子は慌てて首を振って否定する。

「まさか……すごく似合うよ、塔子に……」

確かに、白い靴は塔子の華やかな格好と、ほっそりとした脚にとっても似合った。

飲み会の席で、依子は誰と会話をするわけでもなく一人ぽつんと座っていた。テーブルの端ならまだしも、真ん中という場所がよい居心地が悪い。両隣では笑いが絶えず盛り上がっている。最初は隣に座っていた男性が気を利かせて話しかけてくれたが、二、三言葉を交わしたものの会話が続き、それっきりとなってしまった。

塔子を見やると、彼女は集まった回りの人たちと楽しそうにお喋りをしていった。そのほとんどが男性だ。塔子に思いを寄せている男た

ちも多い。この機会に親しくなろうと思うのも当然だろう。  
つまらない。

依子はビールに口をつけた。飲めないからと断ることもできず、グラスになみなみと注がれ、すでに生ぬるくなってしまったビール隣にいた男性たちは早々と席を移動し、依子だけその場に取り残されてしまった。いつものごとく、誰も自分に話しかけてくる者はいない。かといって自分から話の輪の中に入っていく勇氣もない。早く終わらないかと腕時計に視線を落としたその時、一人の男性が横にすんと座った。営業部の鳴野しのぶだった。何度か社内で見かけ、挨拶程度はしたことがある。

「お酒、苦手なんじゃない？ ウーロン茶でも頼む」

断る間もなく鳴野はさつと手を上げ、通りがかった店員にウーロン茶を注文した。

依子はちらりと鳴野を見る。

やせ形で眼鏡をかけた穏やかな雰囲気。優しそうな人だ。そういえば、挨拶するときもいつも笑顔で答えてくれた。

依子は困惑顔で視線を泳がせた。せつかく鳴野が話しかけてきてくれたというのに、気の利いた会話の一つも浮かばない。

どうしよう。

「僕もその作家が好きなんだ……」

唐突に、鳴野は椅子の背もたれにもたせかけていた依子のバッグを指差した。開いたバッグの口から読みかけの文庫本の背表紙がのぞいている。

依子は驚いた顔で鳴野を見つめ返した。それを鳴野は勘違いしたらしい。

「あ、ごめん！ 鞆から見えたから、僕もその本読んだし、話したいなつてつい……。いや、鞆の中身見るつもりは……」

鳴野は罰がわるそうに口ごもる。

依子が驚いたのはそんな理由ではなく。

「この本、昨日発売されたばかりなのに、もう読んだの？」

「徹夜で一気に。おかげでちょっと寝不足」

頭をかきながら笑う鳴野の顔はどこか人なつっこい。つられて依子も笑う。

「本、好きなんですか？」

「暇な日は本ばかり読んでるよ」

「あ、あの……他にはどんな本を？」

うーん、と考え込む顔をしながら鳴野は次々と作品名を口にする。そのほとんどが依子も読んだもので、思わず嬉しくなった。

それから二人は読書という共通の話題に花を咲かせ語り合った。あつという間に時間は過ぎ、いつもなら、お開きになりそうでなかなかならない雰囲気、苛立ちを感じていたが、今日ばかりはまだ終わって欲しくないと願ったほどだ。

飲み会が終了すると、二次会に行く者とそうでない者とに別れる。今まで依子は二次会に参加したことはない。断つても無理に行こうと誘ってくれる人もいない。

依子は二次会組の群れの中にいる鳴野の姿を一度だけ見つめ、そして駅に向かって歩き出した。しばらく歩くと自分を呼び止める声に振り返る。見ると離れたところから鳴野が手を振りながら、こちらへと駆けてくる。

「駅まで一緒に帰ろう」

追いついてきた鳴野は、依子に横に並んで歩き出す。

「二次会は行かないんですか？」

「今日は断った。だいいち、あいつらにつき合ってたら終電に乗り遅れる」

そうですか、と内心の嬉しさを隠して依子は小声で呟いた。

もっと鳴野さんと話したい。そんな気持ちとは裏腹に、繁華街を抜け、駅まで歩く五分ほどの道のり、先ほど楽しく喋ったのが嘘であったかのように二人は無言であった。結局、たいした会話をすることもなく駅へとたどり着いてしまった。

「それじゃ、お疲れ様でした……」



鳴野とは乗る電車が違うため、ここで別れることとなる。

「あの、井田さん！ よかったら、メルアド教えてくれないかな」  
「思いも寄らない鳴野の言葉に、え？ と聞き返す。」

「メールしてもいい？」

駅のホームで電車を待つ依子は頬を紅潮させ、交換したばかりの鳴野のアドレスを見つめていた。男の人とアドレスを交換するなど初めてだった。その時、ディスプレイに受信中という文字が表示され、依子は目を輝かせた。鳴野がさっそくメールをくれたのだと思っただけだ。しかし。

『楽しそうだったね』

差出人は塔子だった。

それから一ヶ月、ほぼ毎日、鳴野とのメールのやりとりが続いた。おもに、読んだ本の感想や、おすすめの本を教えあうという内容だったが、依子は鳴野からのメールを毎日心待ちにするようになった。社内で顔を合わすことがあれば、今までのように挨拶をするだけでなく、話をするようになった。一度だけ、帰りが一緒になったときは二人つきりで食事をした。

もしかして、彼は私に好意を寄せてくれている？ 私、期待していいの？

徐々に鳴野に対する思いが依子の胸をしめ、それが恋心に変わっていくにはそう時間はかからなかった。だが、一ヶ月を過ぎたあたりから、ぱたりと鳴野からのメールが途絶えてしまった。依子から何度かメールをだしてみても返事がくることはなかった。何度も携帯をチェックしては、落胆して肩を落とし、ため息をこぼす。

何か嫌われるようなことではなかったのだろうか。いや、きつと仕事が忙しくてメールどころではないに違いない。

けれど、鳴野からのメールが途絶えたあたりから鳴野と塔子が楽しそうに会話をしている場面を社内でも何度か見かけた。その時、鳴

野と視線が合っても、ふいと目を逸らされてしまった。

まさか鳴野さんと塔子は……。

依子の胸に不安がよぎる。塔子本人に確かめようと思ったものの、勇気がでないまま数日が過ぎていったある日、またもや塔子の買い物につき合うことになった。買い物を終え、喫茶店で一息ついたとき、依子は思い切つて尋ねてみた。

「塔子……鳴野さんと……」

テーブルに頬杖をつきアイステイーのストローをくわえながら、塔子は上目遣いで依子を見る。グロスに濡れた塔子の唇がくすりと笑む。

「別につき合ってるわけじゃないのよ」

塔子の言葉に依子はほつと胸をなで下ろす。

だが……。

「ほら、鳴野君つて本が好きじゃない？ それで祖父の書齋にある蔵書のことを話したらすごく興味をもつて。それから何度か会うようになったの。それでね……」

唇に人差し指をあて、内緒話をするように塔子は声をひそめた。

「依子にだけは言っちゃうけど、この間食事に誘われて……その後」  
それ以上は聞きたくない。

「お酒も入ってたし、何となく流れで……」

つまり、二人は流れでそういう関係になったのだ。

依子の密かな思いは打ち砕かれた。

唇を噛みしめ、テーブルに置いていた震える手を隠すように、そつと膝の上に移す。

何故、悔しがる？ そもそもつき合つてと言われたわけでもない。一人で勘違いして浮かれていたのは自分だ。誰だつて塔子のような美人に言い寄られたら心が傾くのは当たり前。結局、鳴野もそうだった。

「でも、それ以来、鳴野君たら、何か彼氏気取りなのよね。あたし全然タイプじゃないのになあ。そういえば、依子、最近彼と親しか

つたじゃない？　もしかして……」

「違うわよ！」

思わず声を上げてしまい、自分で自分の声に驚く。

「そんなじゃないから……」

間違いなく塔子は知っていて、わざと私から鳴野を奪ったのだ。

塔子は私の欲しいものを奪っていく。私を惨めにする。

「そう？　ならいいんだけど」

塔子の意地の悪さに腹立たしさを覚えた。　わき上がるのは憎し

みという感情。

店を出て駅につき、ホームで電車待ちをする間、依子は隣に並ぶ依子をちらりと見やる。

間もなく電車が到着するというアナウンスが流れ、依子はそつと一歩後ろにさがった。

この女さえいなければ。私の前から消えてしまえば。よろけた振りをして背中を押ししてしまえばいい。

心の闇が依子を浸食する。

すべての雑音が遠のいていく。心の中の声が塔子を殺してしまえと囁く。

ホームの端から電車が滑り込んできた。

依子は塔子の背中に両手を向ける。

「依子？」

不意に塔子が振り返った。同時に目の前を電車が通り抜けていく。吹きつける冷たい風に依子は我に返る。

両手を塔子の背中に向けたかつこのまま依子は、今にも泣き出しそつに顔をゆがめた。

私、何をしようとしたの。

罪悪感と恐怖に身体を震わせた。

扉が開き車内に乗り込もうと乗客たちが後ろから押し寄せてくる。その流れに逆らい依子は一歩、二歩後ずさる。

「どうしたの？　依子」

依子は何度も首を横に振る。そして、身をひるがえし、その場から逃げるように走り去った。

その後、依子は体調不良という理由で一ヶ月間会社を休職した。

「え？ ちょっと、誰？」

始業直前、事務室に颯爽と現れた女性に社内は騒然となった。

「新しい派遣さん？」

「聞いてないわよ」

みなが目撃する中、その女性は軽やかな足取りで真っ直ぐに部長の席へと向かい頭を下げ、さらに迷うことなく依子の席についた。

「え？ まさか井田さん？」

うそ、と誰もが口々に驚きの声を上げた。

依子だとわからなかったのも無理はない。彼女は明らかに誰の目から見ても変わった。

あか抜けない黒縁の眼鏡を外し、重たく感じられたストレートの黒髪は軽い雰囲気にかットされている。化粧つけのなかった顔には上品なメイクをほどこし、何より体型がすっきりとしている。

「まるで……別人」

「井田さん、どうしちゃったの？」

「全然雰囲気が違うんだけど」

女子社員たちは仕事もそっこのけで、興味もあらわに依子の回りに集まってきた。その輪に遅れて塔子もやってくる。

「体調はもう大丈夫なの？」

「ええ。迷惑かけてごめんなさい」

今まで見せたことのない明るい笑顔で回りを見渡し、依子は長々と休んだことを詫びた。

「それにしても、ずいぶんと……」

驚いたといわんばかりの目で、塔子は依子の頭から下へと視線を移し、そして目を見開いた。

「その白い靴……」

パールのきいたピンクの口紅に彩られた依子の唇がふつと微笑む。「塔子が履いているのを見たら、やっぱり欲しくなって、お店の人に頼んで取り寄せてもらったの」

そう、と塔子は小さく呟いた。

その日一日、誰もが依子から視線を逸らすことができずにいた。以前なら、自信なさげにいつもおどおどしていた依子だが、本当に別人かと思われるほど、きびきびと動き回り、積極的に仕事をこなしていった。他の部の人間が事務に立ち寄ると、やはりえ？ と驚いた表情で依子に注目した。

井田依子が別人のように綺麗になったという噂はたちまち社内に広まり、用もないのにわざわざ他の部署から見に来る者までいた。

最初は遠巻きに依子を眺めるだけだったみなも、徐々に依子に話しかけてくるようになり、数日後には依子の回りに人が集まるようになった。

「依子ちゃん、昼飯食べに行かない？ おごるよ」

「いやいや、俺とつき合ってよ」

「依子ってどこのコスメ使ってるの？」

「素敵な服着てたけど、どこで買ったの？」

依子は内心驚いた。今まで誰も自分に話しかけようとする者などいなかったのに、誰もが自分に興味をしめしてくれた。男性にも声をかけられ、女性たちからはメイクやファッションのことを聞かれるようになった。

外見が変わっただけで自分に自信が持てるようになり、物怖じずることなく、誰とでも話ができるようになった。

失恋の痛手と、塔子をホームに突き飛ばそうとしてしまった罪悪感に苛み、依子の体重はあつという間に落ちた。今までの服が身体に合わなくなり、思い切っ立ち寄ったショップで、着てみたいと思う服が着られるようになったのがきっかけだった。さらにファッションやメイク雑誌を読みあさり、今まで興味のなかった化粧品売り場のカウンターに出向いた。メイク一つで変化した自分の表情が

依子にさらに自信をつけた。

もう以前の私ではない。

一度、廊下で鳴野なるのとばったりと会った。何か言いかげようと口を開いた鳴野に、依子は目を合わせることなく通り過ぎた。すれ違う瞬間、鳴野がうなだれたのが視界に入った。

依子の口元に薄い笑いが刻まれる。

あなたなんか、相手にするわけないでしょう？

会社に復帰してから塔子とうしとの関係も変わった。塔子と一緒にいることがなくなったのだ。依子自身、塔子を避けていたし、塔子もそんな雰囲気だった。そんなある日、会社の廊下を歩いていたら依子は、階段の踊り場で塔子と若い男性が密着した状態で親しげにしているのを目にする。依子の存在に気づいた塔子は咄嗟に男から離れた。ちらりと見た相手の顔は営業部の安積あづみだった。

小走りに走り寄ってきた塔子は、胸の前で両手を合わせ、困惑の表情を浮かべる。

「みんなには黙っててね。お願い」

依子は目を細めて塔子を見据えた。

「鳴野さんはどうしたの？」

どこか棘を含んだ依子の問いかけに、塔子は眉をひそめた。

「彼とは何でもないって言ったじゃない。それに、会ったび本の話ばかりで退屈。つまらない男よ」

依子はふと、まだ階段の踊り場で立ちつくしている安積に視線を向ける。安積の目が塔子ではなく自分に向けられているのは気のせい。さらに、安積が自分に笑いかけたのも。

しかし、それは思い過ごしではなかった。仕事を終え会社を出た依子は安積に呼び止められたのだ。

「依子ちゃん」

馴れ馴れしく名前で呼ぶ安積は、片手を上げてこちらへと歩み寄ってくる。

「帰り？ 飯でも食いに行かない？」

「誘う相手が違うんじゃない？」

眉をひそめて安積を睨み、依子は再び歩き出す。が、咄嗟に前に回り込んだ安積に行く手を阻まれてしまった。まなじりを吊り上げ、依子は安積を見据えた。

「君、ほんと変わったね。すごく綺麗になって驚いたよ」

綺麗と言われて胸が跳ね上がる。その言葉は何度聞いても依子を舞い上がらせる。

「いい店を知ってるんだ」

素早く依子の背に手を回した安積は、強引に依子をつながし歩き出した。

ベッドから身を起こし、依子は乱れた髪をかき上げた。泣きたいような、笑いたいような、どちらともつかない複雑な感情が依子の胸を揺らした。以前、酔った勢いで何となくそういう関係になったと言った塔子の言葉を思い出す。

ほんとだ……雰囲気の流れられて好きでもない男と。

ベッドに仰向けで寝そべり、煙草をふかしている安積を肩越しに振り返る。依子の視線に気づいた安積は、煙草を灰皿にもみ消し、背に抱きついてきた。依子はするりとその手から逃れ立ち上がる。

「帰るわ」

咄嗟に安積に腕をつかまれ引き寄せられる。

「あんたさ、初めてだったんだろ？」

「だから何？」

眉間を寄せて依子は安積の手を振り払う。安積は一瞬呆気にとられた表情を浮かべ、そして肩を揺らしてくつくつと笑った。

「いいね、そういう気の強いところ、好きだよ。今度、いつ会える？」

またしても、依子の胸が鳴る。

安積が自分を求めてきている。そして、初めて塔子から何かを奪うことができた。

その後も、誘われるまま安積と会い、会ったばかり身体を重ねた。愛のない行為による嫌悪感も、いつしか塔子よりも優位にたてたという優越感へと変わっていった。

安積との曖昧な関係が数週間続いた。特に隠していたわけでもないので、噂はあっという間に社内中に広まった。当然、塔子の耳にも入っただろう。案の定、噂が広まっただけで、塔子に開いている会議室に呼びだされた。

「どういうつもり!」

凄まじい形相で塔子が詰め寄ってくる。

この時を待っていたとばかりに、依子は口元に薄い笑いを浮かべた。

「いきなり何?」

「とぼけないですよ! 安積さんのことよ!」

依子はあごの下に手をあて、ふっと笑った。

「……彼の方から誘ってきたのよ。文句があるなら彼に言ったら?」  
思い知るがいい。今まで私が味わった痛みをあなたにも教えてあげる。

「あたしが安積さんとつき合っているの知ってたのに!」

あんな男のどこがいいというのか。必死になっている塔子の様子がおかしくて、思わず吹き出してしまいそうだ。

「安心して。あんな男、あたしのタイプでも何でもないから。塔子がそんなに彼が好きならもう会わないわ」

唇を噛みしめ、塔子は手を強く握りしめている。今にも平手が飛んできそうな勢いだ。こんな悔しそうな顔をする塔子は初めて見る。塔子が私に嫉妬している。

その時、手にしていた携帯が鳴った。ディスプレイに視線を落とすと、安積の名前が表示される。この男はなんていいタイミングで電話をかけてきたのだらう。依子は意味ありげな目でちらりと塔子を見やり電話に出た。

「安積さん?」



安積という名に反応した塔子は、会話を必死に聞き取ろうと息を止め、じつとこちらをうかがっている。

塔子に思い知らせることができたなら、もう安積には用はない。「悪いけど、もう安積さんとは会わないわ。電話ももうかけてこないで」

それじゃ、と言っや否やに依子は電話を切り、優越感にも似た笑みを塔子に向けた。

「これでいいんでしょう？」

「許さないから……絶対に許さない！」

人目も気にせず叫ぶ塔子の金切り声に、通りすぎる人が何事かと驚いて振り返る。

ちょうど通勤帰りということもあってか駅のホームは人混みであふれかえっていた。そのホームの最前列に依子は立っていた。

思わずこぼれ落ちる笑いを懸命にこらえる。

今までの鬱屈していた気分が取り除かれ、晴れ晴れとした気分だった。嫉妬に満ちた塔子の顔を思い出すたび、愉快でたまらない。

思えば、ちよつと前まで自分もあんな顔で塔子を見ていたのだ。依子は足下を見てふつと笑う。この白い靴も今の私ならばきこなせる。塔子なんかよりもずつと似合う。

やがて特急電車の通過待ちを知らせる放送が流れたその時、背後がざわめいた。

何？ と依子は振り返る。

人混みを押ししのけ、列の最前列、こちらへと真つ直ぐに向かう塔子の姿が目飛び込んだ。悪鬼さながらの表情で迫る塔子が両手を前に突き出した。まさか、と依子は足を一步引く。塔子が走ってきた。次の瞬間、強い力で肩を押され依子は足をよろめかせた。慌てて何かにつかまろうと手を伸ばしたが、つかんだのは隣に立っていた女性のバッグだった。その女性は巻き添えになるのを恐れ、あっさりとはバッグを手放した。不自然な体勢で線路へと転落する依子。

そのすぐ向こうから特急電車が速度を落とすことなく滑り込んできた。

何もかもそれは一瞬のできごとであった。

叫び声を上げる間もなく、依子の身体が鈍い音とともに消えた。

飛び散った赤い塊は肉片か。

急ブレーキで止まる電車と、響き渡る人々の悲鳴。駅員を呼べと叫ぶ声。

「君……」

一人の男性が恐る恐る塔子をかえりみる。

両手を前に突き出した状態で、塔子は笑いながら線路の下に視線を落とす。

車両の隙間から、依子の細い足がのぞいていた。赤い靴をはいた依子の足が。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3533ba/>

---

赤い靴

2012年1月9日02時48分発行